

《論文》

エチオピア暦ミレニアムを契機とした ラスタファーマーライの再編 ——スクール・オブ・ヴィジョン派を 中心に

神 本 秀 爾

1. はじめに

本稿の目的は、20世紀末のジャマイカで結成されたラスタファーマーライ宗派、スクール・オブ・ヴィジョン派（Haile Selassie I School of Vision、以下特別にことわらない限りSOV派）の現状報告をおこない、ラスタファーマーライにおける宗派へのコミットメントの特徴について考察を加えることである。

ラスタファーマーライの歴史的展開を手短に整理したうえで、本稿の視座を示す。ラスタファーマーライとは、1930年のハイレ・セラシエ I 世（Haile Selassie 1st）のエチオピア皇帝即位を契機にジャマイカではじまった、思想や実践に関わる体系の総体である。信徒であるラスタは、セラシエこそが旧約聖書に記述されたメシアとして崇敬している。ラスタたちはみずからをイスラエルの約束の民と位置づけ、離散黒人にとっての起源の地であるアフリカ大陸への物理的ないし精神的な帰還を追求してきた。ラスタファーマーライの内部にはさまざまな宗派や集団、個人が存在し、全体を統率するような組織や完全に共有された教義は存在しない。人びとを通じて全体としてのラスタファーマーライが形成されていることから、先行研究では、無頭的〔Chevannes 1995:31〕、綱の目状〔Edmonds 1998:349〕の組織等と呼び習わされてきた。

ラスタファーマーライは、出現当初、キリスト教が主流のジャマイカでは「カルト」と呼ばれ取り締まりの対象となったり、暴力の対象となったりしたが、独立にともなう黒人意識の高揚やポピュラー音楽レゲエとの関係の深まり等を受けて、その位置づけは「のけ者から文化の担い手へ」〔Edmonds 2002〕と変わってきた。また、国外への移民やレゲエの流行、アフリカ大陸へ自力帰還を遂げたラスタの出現などによって、現在では世界各地にラスタファーマーライは越境・拡散している。

ラスタファーマーライに関する民族誌的調査に関する重要な指摘がファン・ダイク（van Dijk）によってなされている。その指摘とは、ラスタファーマーライに関する民族誌的調査にもとづく研究は、特定の宗派や個人に対する調査から得られた資料にもとづいているのにもかかわらず、一般化して論じる傾向があったというものである〔Van Dijk 1993:5-6〕（1）。そこに欠けていたのは、宗派間の差異や、信徒間の差異から生じる摩擦を、ラスタファーマーライ刷新の原動力のひとつとみる視点である。そこで、本稿では、一宗派に着目し、宗派の設立と独自性の創造、信徒の離合集散のメカニズムの一端を描き出すことで、ラスタファーマーライが刷新されていく過程の一端を描いていきたい。

ラスタファーライは、エチオピア皇帝の即位をきっかけに始まった運動であるため、エチオピアやセラシエの動向に大きく影響を受けており、アムハラ語やエチオピア暦にも関心を示してきた。本稿が対象とするSOV派は、2007年9月11日のエチオピア暦のミレニアムにおける救済を教えの核として展開してきた宗派であり、ミレニアムを目前に、ラス・ジュニア・マニング (Ras Junior Manning) を議長として、ラスタファーライの統率を図るために13の宗派の代表が集まって結成されたEthio-Africa Diaspora Union Millennium Council (EADUMC) の一員でもあった (2)。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、SOV派の概要を述べ、第3節では、同派と他宗派を大きく分かつ教えについて述べる。第4節では、信徒の概要を述べる。第5節では、宗派の自律性を保つことの困難を示すひとつの事例を紹介する。なお、本稿で用いる一次資料は、筆者の2008年6月から2009年7月にかけて複数回に分けて実施した調査で得られたものと、その後の追跡調査で得られたものである。

2. スクール・オブ・ヴィジョン派の概要

本稿が対象とするSOV派は、ジャマイカ島北部に位置するセント・アン教区出身のデルモット・フェイガン (Dermot Fagan) (1954年生) がキングストンで創設した宗派である。幼い頃に母が兄弟を残してイギリスに移民したため、彼とその兄弟はばらばらに育ったという。高校へは行かず、1975年から1981年までのあいだは、ジャマイカ国防軍 (Jamaica defence force) に勤務していた。1982年に退役した後、軍隊時代の友人らとアメリカに渡った。その冬、ともに移民した友人のひとりを介して、彼はラスタファーライに開眼した (3)。アメリカでは、建設現場等を転々として働きながら生計を立て、1993年に帰国すると、キングストン市内のドウェイン・パークで建設請負業やホールセールの店の経営を始め、ナイヤビンギ・オーダー (Nyabinghi Ancient Council) 派の長老ビンギ・ロイ (Binghi Roy) にも師事し知識をたくわえた。

1996年、フェイガンはSOV派の現在へと連なる教えに目覚めると、店先で説教を始め、司祭 (priest) を名乗るようになった。その教えについては第3節で詳述するが、来るべき終末に向けて、洗礼を受けて生き直すことをすすめるものであり、宗派の名称にも表現されているように、決断や判断に際して、ヴィジョン (啓示的な夢) を重視するものであった。1998年に宗派の立ち上げがおこなわれ、フェイガンと、現在に至るまで側近として活躍している少数の男性信徒が中心となって、キングストンの北側に位置するブルー・マウンテン山麓の一角を占拠し、コミュニンの建設を始めた。同年7月には、市内パピンの公園で安息日に集会をおこない始めた (4)。

SOV派が拠点としているコミュニンには、安息日を守る空間、経済基盤を築く空間という2つの側面があるとされている。キングストンからコミュニンに行く場合、ホープ川沿いの1号線を北上していくのが最も早いルートである。標高も1100メートルをこえた場所で1号線のある峰の東側に連なる別の峰にコミュニンの入り口がある。コミュニンに続く斜面は、信徒たちによって踏み固められ整備されている。山道を30分程のぼってコミュニンが近づくと、別の峰の水源からパイプで引いてきた水をためる貯水槽、洗濯や水浴びをするコンクリートづくりの建物が見えてくる。このパイプが2002年に出来上がるまでは、麓まで水を汲みに行っていたという。さらに道を進むと、左手に柵に囲われた畑、ハイレ・セラシエが描かれた大きな岩、正面にコミュニンの木製の門が見えてくる。畑には葉物野菜や人参、豆類等が植えられている。バナナの木もところどころに植えられている。左手の奥、より高い場所に点在する掘建て小屋が信徒たちの住居である。そのほとんどの壁はベニヤ板で出来ており、雨風を受けてこげ茶や黒に変色している。

門を抜けた左手に、緑、黄、赤のラスタ・カラーで塗り分けられた、フェイガンの住居が見える。目の前には1メートル程の高さにコンクリートを塗り固めてつくった礼拝スペースがある。縦横5メートル×15メートル程の広さの、礼拝スペース

を中心としたこの場所が、コミュニオンでは唯一の平地である。この礼拝スペースの西側正面にはゲストハウスがある。その隣には若い夫婦の住居があり、一角は居住者向けの簡易的な商店になっている。南側には先ほどとは別の貯水スペースがあり、そこから下に向かう斜面にも畑がある。眼下にはブルー・マウンテンに広がる木々と、キングストンの風景が広がる。コミュニオンへとつながる山道の途中に見えた信徒たちの掘建て小屋は、北側の斜面に立ち並んでおり、筆者の調査時には43棟あり、7棟が建設中だった。コミュニオンの生活時間は、一日三回の儀礼、安息日、新月のたびにおこなわれる儀礼、ハイレ・セラシエの誕生日や戴冠記念日におこなわれる儀礼によってリズムをつけられていた。コミュニオンの運営に関しては、農業が重視され、ユリ科植物を主原料とした健康飲料（ルーツ・ワイン）作り、2008年以降は弁当販売で現金獲得が目指されていた。

3. 特徴的な信念

宗派として名乗ることは、その他の宗派や個人との教義や思想、実践上の差異を強調することである。SOV派でも、ラスタファァライのスタンダードな解釈は共有されているが、本節では、SOV派を他宗派と大きく分かつ、エチオピア暦のミレニアムと関わる終末論的側面に焦点を当てる(5)。

筆者がはじめてフェイガンと話をしたのは、2005年9月のパピンでのことで、筆者が頻繁にSOV派と接触するようになったのは、2008年7月以降のことであり、その間に、救済は実現することなくミレニアム(2007年9月11日)は過ぎ去ってしまっていた。2008年以降、宗派を観察する限り、2005年や2006年と比べて、若干熱気が冷めているようにも感じられたが、主張に大きな揺らぎは見られなかった(6)。以下に、2004年の7月28日にフェイガンがジャマイカの一般紙Jamaica Gleanerに投書した文面を引用し、補足説明を加えながら、その論理を紐解いていきたい。

編集者さまへ

最近、数名のメキシコ連邦職員が、2003年11月に埋め込み用チップを受入れはじめたのは、個々人に「タグ付け」をしていくという、彼らの計画と関係していることを明らかにしました。このような情勢は、人間へのチップ埋め込み技術が存在し、その技術が私たちの世界を変貌させ始めているということを証明しています。ジャマイカで、ハイレ・セラシエ陛下をたたえるスクール・オブ・ヴィジョン派は、1996年より人びとに対して、神から彼らに授けられた預言は、悪魔が魂を奪うためにチップを用いる時が到来するというものだということを警告してきており、そのため、より多くの人びとが、その技術が存在することに気づき始めましたが、この技術的革新こそが聖書に記された「悪魔の徴」であるということについては、未だ受け入れようとしていません。

霊的な影響

人びとが、この徴がもたらす霊的な影響(についての理解)を受け入れることを拒むのにも関わらず、このラスタたち(スクール・オブ・ヴィジョン派)は、新月には各地のコミュニティで彼らの神を讃え続け、土曜日にはパピン公園で多くの人が語る、白いジーザス(Geezus, Geezas)を弾劾し、聖書に描かれている黒いイエスアス(Jes-us)を認めるべきだと力説しています。彼らはまた、ハイレ・セラシエ帝が地上における二番目の救い主の現れであり、新たなエルサレムへの移動の約束された時に馬車(chariot)に乗る権利を得るために、彼の名において洗礼を受けることが必須であると認めることが不可欠だと強調しています。

デルモット・フェイガン(司祭)

9、ブカン・アベニュー、ドウエイン・パーク、キングストン20

この記事では、生体に埋め込むことのできるチップが悪魔の徴であるということと、スクール・オブ・ヴィジョン派のセラシエ崇拝の正当性について語られている。そこで、以下に、チップをめぐる信念、セラシエによる救済をめぐる信念について、先に引用した投書記事とフィールドワークで得られた語りや資料を混ぜ合わせながら、読み解いていきたい。

ここで悪魔の徴とされているチップは一般にはマイクロチップと呼ばれるが、SOV派ではマイクロバイオチップと呼ばれる。このチップは、円筒形のガラスにチップを入れた、電子標識器具のことである。この技術自体は1983年に開発されたものであり、現在ではペットや危険生物の管理等に用いられている。

フェイガンは、人間にも利用可能なマイクロチップを「悪魔の徴」と呼び、警告している。この「悪魔の徴」とは、ヨハネの黙示録13章16-18節、14章9-11節に由来している。彼がメキシコ連邦での計画に言及していたように、彼は人びとの悪魔への隷属は、国等の組織を介して貫徹されるというイメージを抱いている。彼は2005年5月のラスタファリ関連誌*IRASCOM JOURNAL*でも同様の見解を示し、ジャマイカの納税者番号(Taxpayers Registration Number)、アメリカの社会保障番号も同様の性質のものとして非難している[InIversal Rastafari Community 2005:20]。しかし、実のところ、このマイクロチップによる人間の管理をめぐる議論は、フェイガンが独自に発想したものではなく、代表的な「陰謀論」のひとつであり、それらは積極的に利用されてきた。

例えば、2009年のある安息日集会の際に配られたパンフレットには、黒人の左翼活動家グレン・フォード(Glen Ford)が2006年に書いたとされる、マイクロチップに言及した私信、あるいはブログの記事が印刷されており、別のときには、アメリカ食品医薬品局(Food and Drug Administration)が唯一認めた、人間向けの埋め込みチップを製造しているVerichip Corporationのマイクロチップの写真が用いられていた。また、ある信徒は、チップやその挿入機、挿入されたチッ

プを判別する読取機の写真、チップが映ったレントゲン写真などを印刷した紙を配布用に所有していた。

本稿の関心との関係で重要なのは、フェイガンがマイクロチップによる管理を、奴隷制の延長線上に位置づけただけでなく、いわゆる陰謀論的な要素とラスタファラーの教えを結びつけたことである。彼は、新世界秩序をつくりあげている世界の背後に、彼が記事中で白いジーザス(Geezus, Geezas)と呼ぶ、世に広く知られているイエス・キリストがいると論じており、この状況について、ジャマイカ人は現在も「制度的にも霊的にも奴隷状態にある」と筆者に語っていた。

このような認識のもと、SOV派が救済に向けてとった行動のひとつが、ハイレ・セラシエの名によって洗礼をおこなうことであった。この洗礼は、簡易的にオリーブオイルを額に塗ることで済ませる場合もあるが、多くの場合パピンないしコミュン近くの川で全身を水に浸すスタイルでおこなわれる。そして、救済を待ちわびる人は山に住まなければならないというイザヤ書56章7節、マタイ伝24章、詩編87章を用いて、ブルー・マウンテンのコミュンに住むことを推奨した。つまり、積極的に待つというのがSOV派のとった手段だった。フェイガンはイザヤ書66章13-15節を用いて、救済のときに、主が戦車に乗って火の中を突き進み、新しいエルサレムに信徒を運んでくれると主張した。その火の戦車(chariot)はUFOのようなものとイメージされている。



写真1 セラシエとUFOのような戦車

4. 信徒たち

SOV派の信徒とはどのような人びとだったのだろうか。本節では、2009年4月時点のコミュニケーション居住者の属性を述べていく。なお、当時の居住者は121名であり、成人は男女合わせて67名であった。

表1 成人信徒のかつての所属宗教

| | 男性 | 女性 |
|-------|----|----|
| キリスト教 | 5 | 6 |
| ムスリム | 0 | 1 |
| 仏教 | 0 | 1 |
| ラスタ | 3 | 1 |
| 無回答 | 36 | 14 |
| 計 | 44 | 23 |

表1は、成人信徒のかつての所属宗教を示したものである。無回答が最も多いが、回答者のなかでは、元キリスト教徒だというのが最も多い。また、ラスタファアーライ一般において、キリスト教会に属していた過去は否定的にとらえられるため、無回答者のほとんどは、元キリスト教徒と考えて良い。結成が1998年と歴史が浅いことを考えると、コミュニケーションで暮らす人びとのほとんどが、第一世代のSOV信徒だと言えることができる。

信徒たちにコミュニケーションで居住する理由を聞くと、救済をめぐる前述の物語や、そのきっかけとしての入信の語りが披露されることが多かった。その一例として、1997年にSOV派の前身と出会ったバードアイの例を紹介する。

彼は、陸軍でボディ・ガードとカトリックの司祭として勤務していたのだが、仲間のひとりがラスタで、セラシエのことを軍隊の内部で説いていた。ある時、彼に誘われて、フェイガンの元を共に訪れ、彼の解釈を聞くうちにラスタファアーライにも関心を持つようになった。それから間もないある夜、カーキのスーツを着たハイレ・セラシエが7匹のライオンを連れており、その一団にライフル（M16）をもった自分が付き添っているとい

うヴィジョンを見た。このヴィジョンが、自分がセラシエと共に生きていく運命であることを示唆していると考えた彼は、1998年の2月末に軍隊を辞め、3月になるとすぐに洗礼を受けブルー・マウンテンで暮らし始めた。

表2 男女の年齢分布

| 年齢 | 男性 | 女性 |
|--------|----|----|
| 0～10 | 25 | 25 |
| 11～20 | 2 | 2 |
| 21～30 | 8 | 4 |
| 31～40 | 10 | 7 |
| 41～50 | 3 | 3 |
| 51～60 | 1 | 2 |
| 61～70 | 1 | 0 |
| 不明、無回答 | 21 | 7 |
| 計 | 71 | 50 |

表2からは、主要な年代が30代であり、コミュニケーションの構成員には男性が多いこと、10歳以下の子どもが非常に多いことが分かる。

表3 世帯分布

| 世帯の種類 | |
|------------|----|
| 家族あり（夫婦と子） | 12 |
| 家族あり（夫婦のみ） | 8 |
| 家族あり（父と子） | 2 |
| 家族あり（母と子） | 2 |
| 家族なし（単身男） | 21 |
| 家族なし（単身女） | 1 |
| 計 | 46 |

信徒を世帯で分けると、独身男性が多く、独身女性が少ないことが分かる。女性のほとんどは、すでに居住していた男性のパートナーの元を訪れていた。

表4 成人信徒の主な労働と役割

| 主な職業 | 男性 | 女性 |
|------------------|----|----|
| コミュニオン向け農業 | 10 | 0 |
| コミュニオン向け建設 | 1 | 0 |
| コミュニオン向け農業と建設 | 2 | 0 |
| 弁当屋 (7) | 3 | 0 |
| ルーツ・ワイン (8) | 5 | 0 |
| 外部で被雇用 | 3 | 5 |
| 自営 (外部) | 1 | 1 |
| クラフト、ワインの販売 (外部) | 1 | 1 |
| 商売 (内部) | 1 | 2 |
| 不明、無回答 | 17 | 14 |
| 計 | 44 | 23 |

*男性はプリーストをのぞく

コミュニオンでは農業が重視されていることを前述した。コミュニオン向けの農業と建設、弁当屋とルーツ・ワインにたずさわる男性は、回答者27名中21名である。ルーツ・ワインと弁当屋での仕事に従事するものは、その売り上げからわずかながらの現金収入を受け取っている。女性の場合は、コミュニオン全体に向けた仕事を果たすことは期待されておらず、パートナーを支え、子どもを養育することが期待されている。

5. 宗派間関係

本節では、宗派としての自律性とラスタファライ全体の関係について考えてみたい。2008年に入ると、EADUMCに名を連ねた宗派のなかで、ナイヤビンギ・オーダー派を中心として、安息日集会を共同でおこなったり情報交換を増やしたりすることで、安息日に関わる連帯 (sabbatical alliance) を結成し強化することが試みられるようになった。その一環として、SOV派はナイヤビンギ・オーダー派とのあいだで定期的に、後者の集合拠点であるスコッチ・パスと、SOV派が拠点としてきたパピンで、合同で安息日集会をおこなうようになった。両者の関係について、フェイガンは次のように語っていた。

ナイヤビンギ・オーダー派は (ハイレ・セラシエの即位した) 1930年にはじまった。その意味であらゆるラスタファリの宗派にとっての親のようなものである。だが、自分はSOV派の創設者であり、ナイヤビンギ・オーダー派から派遣された人間などではない。自分はアメリカにいる時にラスタファリを受入れたのであって、特定の師匠がいるわけではない。SOV派は自分が始めたものである。だから、ナイヤビンギ・オーダー派にもSOV派のやり方を認めてもらう必要がある。SOV派はSOV派のやり方で、ナイヤビンギ・オーダー派はナイヤビンギ・オーダー派のやり方でセラシエを崇拝している。やり方こそ違っていたとしても目指すところは一緒なのだ。

彼の主張は、全体と協調していくためには、SOV派の自律性を尊重してもらう必要があるというものである。しかし、ナイヤビンギ・オーダー派では司祭とはごく限られた長老のみが名乗れる職階であるにも関わらず、フェイガンが司祭を称することについて、EADUMC結成に向けた話し合いの過程でも批判を受けたという。このことに端的にあらわれる、ナイヤビンギ・オーダー派との認識上のずれは、両派が同じ場所に居合わせる安息日集会の場面であらわになった。

筆者は2009年6月13日、第2回目となるパピンでの合同の安息日集会に参加した。通常午後1時が開始予定時間なのだが、ナイヤビンギ・オーダー派の信徒たちが、スコッチ・パスに戻るのにかかる時間を考慮して、通常より1時間早い12時に開始されることになった。そのため、コミュニオン外に居住し、安息日にのみ参加している信徒のなかには、集会がいつもと異なる時間にはじまるという連絡を受け取っておらず、いつも通りにきたものもいた。

開始して1時半程、個々の信徒が順番で聖句を唱え、セラシエへ祈りを捧げる儀礼があり、そこから1時間程、儀礼音楽が演奏された。2時半から3時半頃までの休憩時間をはさんだ後、リーズニング (説教や話し合い) を1時間程おこない、

4時半から1時間程儀礼音楽が演奏された後、全員で祈りを唱えて終わった。参加者は最も多い時間で100人を優にこえていた。

この集会では、SOV派とナイヤビンギ・オーダー派のあいだでの儀礼的な手続きやその執行方法の差異が目立った。たとえば、SOV派では、フェイガンがつくった聖句に節と振りをつけて唱えるのが決まりになっているが、そのような手順はナイヤビンギ・オーダー派にはなじみがないものであるため、多くの信徒はそのやり方を無視し、SOV派信徒が祈るのを遠巻きに眺めていた。儀礼音楽の演奏に際しては、ラストたちが伸ばしている房状の髪の毛、ドレッド・ロックスの取り扱いについて、ナイヤビンギ・オーダー派から物言いがついた。ナイヤビンギ・オーダー派の男性信徒たちは演奏に際して、頭にかぶっていた毛糸や革の帽子を取り、頭上に巻いたり束ねたりしていたドレッド・ロックスをあらわにした。そして、彼らは近くにいたSOV派信徒たちに、帽子やターバンを取るようにながし、彼らから注意を受けたSOV派信徒たちの多くは、素直に従ったが、フェイガンは最後までターバンを取らなかった。また、太鼓の叩き方について注文をつけられていた信徒もいた。

その後のリーズニングでは、フェイガンがナイヤビンギ・オーダー派をこの場所に迎え入れられたことを感謝した上で、いつものように説教をおこない、中盤になると、ナイヤビンギ・オーダー派の長老が「安息日に関わる連帯」に関するスピーチをおこなった。その後、長老は、儀礼音楽演奏中に気になった点として、ドレッド・ロックスの正しい取り扱い方について若干の苦言が呈された。彼は『コリント人への手紙』の11章4節から7節の、男性がかぶり物をするべきではないと書かれている箇所を引きながら、普段は社会の中で生きるためにドレッド・ロックスを隠すことはやむを得ないとしても、皇帝に感謝を捧げるナイヤビンギ儀礼のあいだは、ドレッドをさらすことが、霊的な力を高めるためには重要だと述べた。そのことに対して、フェイガンは、SOV派ではドレッド・ロックスの取り扱いについて規定を定めてい

ないため、多様性を容認することも重要であると反論した。

集会終了後に、フェイガンや古くからSOV派と関わっている信徒と話をしたところ、彼らは、宗派としての自律性は尊重されるべきだと語っていたが、一般の信徒のなかには違う見解のものも多かった。帽子を取らされた信徒や太鼓の叩き方について注文をつけられていた信徒は、ナイヤビンギ・オーダー派の長老から教えられたやりの方が伝統的なものであるようであり、子は親を敬うべきなので、受け入れたいと語っていた。このことから、一般の信徒のなかには、ナイヤビンギ・オーダー派との交流を通じて、より深いラストファーライに関する知識や技術を手に入れようという志向が強いように感じられた。



写真2 SOV派の儀礼の行い方にとまどうナイヤビンギ・オーダー派の信徒たち



写真3 安息日に関わる連帯について語るナイヤビンギ・オーダー派の長老

6. おわりに

本稿の目的は、スクール・オブ・ヴィジョン派の現状報告をおこない、ラスタファーライにおける宗派へのコミットメントの特徴について考察を加えることであった。

SOV派は、アメリカ滞在中にラスタファーライに回心したフェイガンが、ジャマイカに帰国した後につくりあげた宗派であった。彼の思想の核心は、マイクロチップをヨハネの黙示録に記載された悪魔の徴ととらえたうえで、悪魔による支配をハイレ・セラシエが妨げ、エチオピア暦のミレニウムに人びとを救済に導いてくれるというものであった。エチオピア暦自体はラスタファーライ全体にとって重要視されているものであったが、筆者が知り得る限り、彼らと同様にミレニウムに救済が起きることを積極的に喧伝している宗派は存在しなかった。むしろ、EADUMCの結成理由に見られるように、関心が共有されている出来事であるため、これを機会に運動全体に新たな潮流を起こそうという志向が主流であった。

筆者の主な調査期間はミレニウムが過ぎ去った後のことだったが、それでも宗派が存在し続けた要因として、人びとの救済を約束する洗礼という仕組みを介して、新たな信徒が入り続けること、独自のマイクロチップにまつわる教えの力、コミュニケーション生活そのものの魅力等をあげることができる。

それでは、SOV派の事例から、宗派にコミットするという点について、どのようなことを導き出すことができるだろうか。人びとは、洗礼を受けることで、SOV派の信徒となる。しかし、SOV派信徒であるということそのものの拘束性は決して強いものではなかったことを、合同安息日集会の事例が示している。ナイヤビンギ・オーダー派が中心となってEADUMCとしての連帯の推進を主張するなかで、SOV派は、信念や制度的な次元ではたしかに自律性を保っていた。しかし、集会に参加していた信徒たちのなかには、SOV派の実践や思想に否定的な見解を示すナイヤビンギ・オーダー派の主張にも関心をもっているものがいた。つまり、フェイガンが理想として

いる宗派としての自律性と、個々の信徒にとっての自律性は必ずしも一致していなかった。このことは、ラスタファーライ全般に惹かれる浮動票的な人がSOV派のなかに多く含まれていること、SOV信徒になるために受ける洗礼は、人びとをラスタファーライに忠誠を誓わせることはできても、宗派に忠誠を誓わせる程の拘束力を持つてはいなかったことを示唆している。言い替えると、SOV信徒となった人たちは、洗礼を通じて、SOV派の背後にあるラスタファーライの太い水脈や、SOV派以外のさまざまな支流と出会うきっかけも同時に得ていたのである。それは、奇しくもフェイガンが筆者に語った「めざすところが同じ」だからこそ避けがたく生じることなのである。わずかな間に有名宗派のひとつとなったSOV派の事例は、このような集合と離散がラスタファーライを活性化させ続けているということを示唆している。

Notes

本研究に関わるフィールドワークは、松下国際財団（現松下幸之助記念財団）平成19年度研究助成「ジャマイカにおける宗教と人の多層的な関係—ラスタファリ運動の動態に関する文化人類学的調査」および、京都大学教育研究振興財団平成20年度海外長期派遣助成「ジャマイカ、ラスタファリ運動の再編に関する文化人類学的調査」の支援を受けておこなった。記して感謝したい。

- ¹ レナード・バレット（Leonard Barrett）の著書は1962年に選挙に参加したサミュエル・ブラウン（Samuel Brown）のグループに多くを負っている。自身もラスタとなった女性人類学者キャロル・ヤーニー（Carole Yawney）は、1961年のアフリカ派遣時に活躍したマーティモ・プラノ（Mortimo Planno）のグループで主な調査をおこなった。バリー・シェバンス（Barry Chevannes）は、1958年から1960年にかけてアフリカ帰還要求運動と政府転覆計画で話題となったClaudius Henry and his Peacemakers' Associationと、ロバート・ハ

インズ (Robert Hinds) のグループで調査をおこなった。アメリカの人類学者ホミアック (Homiak) は (ナイヤビンギ派の中核である) Haile Selassie I Theocracy Governmentの長老を対象に調査をおこなった。ロバート・ヒル (Robert Hill) は初期の代表的ラスタ、レナード・ハウエル (Leonard Howell) のグループで調査をおこなった [van Dijk 1993:5-6]。

2. 残りの12宗派は、Nyabinghi Ancient Council、Twelve Tribes of Israel、Royal Ethiopian Judah Coptics、Haile Selassie Theocracy Government、Ethiopian Orthodox Organisation、David House、International Peacemakers、Camp of David、Ethiopian World Federation、Leonard Howell Foundation、The Rastafari Centralisation Organisation、Dreaded Nyabinghiである。
3. その友人は何も言わずセラシエの写真を見せながら「これが誰だと思う？」と聞き、彼にヨハネの黙示録の5章1-5節を読むように言った。彼はその節を何度も繰り返して読んだ。その友人は「彼 (黙示録に書かれている救世主) はこの人なんだ」と言った。フェイガンは、その後も繰り返してその節を読み、友人の言うことを受け入れるようになったという。彼はセラシエが救世主だということを、「誰かから学んだというよりも、納得した」と筆者に語っていた。
4. 筆者は、2005年以降たびたびこの集会に参加してきた。パピンはキングストン中心部のハーフ・ウェイ・ツリーと北部の各地をつなぐバス路線の中継地点であり、近隣には市場や大学、病院等がある、にぎやかな場所である。集会は外部にも開かれたものであり、観光客がその模様を撮影したり、一緒に写真を撮ったりしていた。
5. たとえば、神は黒人であることを示すという、「私は黒い」(エレミヤ書8章21節)、「その髪はウールのようだ」(ダニエル書7章9節)、「赤目、ブロンズの肌をしている」(ヨハネの黙示録1章14-15節)等はSOV派でも引用される。
6. 彼の2013年10月27日に西インド大学でおこなわれた全宗派集会における発言を見ると、預言の

成達は2016年ないし2017年と延期されているが、基本的な主張は変わっていない。

7. 弁当の値段は150、200、300ジャマイカドル (当時1ジャマイカドルは約1.3円) の3種類であった。主な材料は各種の豆類、キャベツ、オクラ、ニンジン、イモ、大豆肉と米等であった。人参やアイリッシュ・モス、ビート・ルート、チェリー、リンゴ等を材料とした生ジュースは、120~150ジャマイカドルで販売されていた。
8. コミュニオンおよび弁当屋にあるプラスチックの樽で、日常的にワインづくりはおこなわれているが、金曜がメインの販売日と定められている。ひとつの樽で、1本142mlの瓶で100本から150本分のワインがつくられる。週に840本から960本分程がつくられるという。小瓶には、フェイガンがデザインしたパッケージが貼られている。

Works Cited

- Chevannes, Barry. "New Approach to Rastafari." *Rastafari and Other African-Caribbean Worldviews*. Ed. Barry Chevannes. New Jersey: Rutgers University Press. 1995:20-42
- Edmonds, E.B. "The Structure and Ethos of Rastafari." *Chanting Down Babylon: The Rastafari Reader*. Ed. N.S. Murrell, D.S. William, and Adrian A.M. Kingston: Ian Randle Publishers. 1998:349-360
- . *Rastafari: from Outcast to Culture Bearer*, Oxford University Press. 2003
- InIversal Rastafari Community. *IRASCOM Journal: InIversal Rastafari Community Journal*. 1 (2). Kingston: InIversal Rastafari Community Jamaica Office. 2005
- Van Dijk, F.V. *JAHMAICA Rastafari and Jamaican Society 1930-1990*. New York: One Drop Books. 1993

Newspapers

- Jamaica Gleaner. Chip implants, 'mark of the beast' July 28, 2004